

Akihiro KINDA ed.

A Landscape History of Japan

Kyoto University Press

2010年 284頁 6,600円+税

本書は、古代・中世の農地・村落・国府等についての景観を文書史料にとどまらず絵図や考古資料、さらに微地形をもその視座に収めた景観研究を精力的に進めてこられた金田章裕氏（人間文化機構長（京都大学名誉教授））編の英文による『日本景観史』の概説書である。日本の景観史に関連した重要な書物として『日本村落史講座』の『第2巻 景観 1 原始・古代・中世』<sup>1)</sup>、『第3巻 景観 2 近世・近現代』<sup>2)</sup>があるが、書名が示すとおり村落景観を対象としている。また、古代都市等も視野に収めたものとしては、編者の『日本古代景観史の探求』<sup>3)</sup>や『古代日本の景観』<sup>4)</sup>等が上梓されている。しかし、正面から日本の景観史の全容を捉えたものとしては、管見の限り本書が初めてである。そのような点から本書が編まれたことは、日本の歴史地理学にとって大変意義深いものといえよう。

本書の構成は次の通りである。なお、執筆者を括弧内に示した。

PART 1 Aims and methodology

CHAPTER1 Methodology and Japanese landscape history: A contextual Approach (金田氏)

CHAPTER2 Formation and transformation of administrative districts (金田氏)

PART 2 Urban landscapes

CHAPTER3 National and provincial in ancient Japan (金田氏)

CHAPTER4 Medieval Towns (山村亜希氏)

CHAPTER5 Capitals and towns in early modern times (山村氏)

PART 3 Rural landscapes

CHAPTER6 Ancient and medieval rural settlement (金田氏)

CHAPTER7 The early modern rural landscape (米家泰作氏)

CHAPTER8 Modernization of the countryside (米家氏)

PART 4 Landscape, materials and representation

CHAPTER9 Landscapes and maps (金田氏・上杉和央氏)

CHAPTER10 Landscapes in literature and painting (米家氏)

CHAPTER11 Monumental landscape (上杉氏)

PART 5 Cultural landscapes

CHAPTER12 Characteristics of the Japanese landscape history (金田氏)

第1部では方法論について述べ、第2部で都市景観、第3部で村落景観をとりあげ、各章を時期毎に分けて解説し、第4部では表現された景観をとりあげている。第5部は総括的な位置付けとなるだろう。以下、章を追ってみていくことにする。

第1章は、本書での景観史に対する編者の提唱する文脈論的アプローチからの日本歴史地理学略史ともいえるものであり、ヨーロッパにおける景観復原研究の動向とも対比しながら述べられている。条里や村落、あるいは古代都市や城下町をめぐる研究の進展にも具体的に触れながら景観復原と変化のプロセスについての統合的研究が洗練されてきた結果、従来の「分厚い」時の断面の描出が景観復原や景観の変化を説明するのに、もはや有効なものではないと述べる。ただ、紹介子には時の断面の厚さは本質的な問題とは思われないので、この点に関してもう少し詳細な説明があればという気がした。さらに、行動論的、認識論的なアプローチの導入に触れながら、文脈論的アプローチが「分厚い」時の断面と「薄い」時の断面に対する第3の研究方法として有効であるとする。一方で、文脈論的アプローチが政治・社会・文化等要因間の関係に注目することから、個別の景観要素を追究する際に分節化された景観要素の認識に終始する可能性があるという慎重さも示しながら、この難点に対しては事実間の文脈を統合して分析することにより克服が可能であるとしている。

第2章は、古代の行政領域や官道、都市・農村景観、中世の政治経済構造の変化、近世の大名領国の形成、近現代の都市化による景観等の変化をとりあげ、歴史的背景として政治史的観点に重きを置きながら概説する。内容的にはやや一般的に過ぎる印象もあるが、外国人の読者に向けて、次章以降の内容の理解を助けるためには必要な章であるかも知れない。

第3章では、古代東アジアにおける日本の政治的位置を俯瞰し、まず首都の景観として宮から京形成への展開と平城京の成立、平安京のプランや右京城の衰退などについて述べる。ついで、大宰府のプランについて自説に基づいて解説し、941年の藤原純友の乱後の構造変化に触れている。さらに、都府楼の建物配置が多くの国府の中心部の建物配置と共通性を有することを指摘し、政庁と正倉などの倉庫群や工房、主要道路などの位置関係をモデル化して示した。このほか、法隆寺や東大寺などの寺院の建立、東北経営の拠点であった多賀城などにも触れており、プランを軸に「古代日本の都市」の全容を概観する。

第4章では、まず中世京都が古代平安京とは大きく異なることを構造変化から述べる。その端的な例として、通りと町との関係が大きく変化したことをあげる。さらに応仁乱後の上京と下京の成長や中世の人口増加に伴う<sup>すし</sup>函子の形成にも言及し、多様な中世京都の景観変化を描出している。ついで鎌倉を取り上げ、13世紀中葉に、幕府が移動して鶴岡八幡宮への参道にとどまらず、鎌倉の都市軸となった若宮通りを中心に、「化粧坂」や「地獄谷」、海岸部などでの景観変化にも言及する。さらに、中世の国府の例として長府をあげる。ここでは中世初期の国府の景観を含めて描いたとされる「忌宮神社境内絵図」と実際の景観とが大きく異なっていたことを示し、現実の景観が複雑で分散的であるのに対して、地方領主によって認識された景観は諸機能が統合され集中的な形式であり、古代都市を理想型として再生しようとしたゆえであろうと分析する。このほか白山平泉寺、山科本願寺、石山本願寺などの「寺内町」、博多、小浜の港町、一乗谷といった戦国期城下町など多彩な事例を取りあげる。なかでは最近、発掘調査から多くの知見が得られている白山平泉寺の紹介は新鮮である。

第5章では近世都市を紹介する。まず16世紀後半の信長による小牧城下町と安土城下町を取り上げ、そのプランに注目する。前者が平行な直線道路と方形街区から構成されるのに対して、遅れて建設されたにもかかわらず後者は必ずしもそうっていないのは、中世琵琶湖水運を担った港町常楽寺が存在したことによるとした。次に秀吉の大坂城下町と京都の御土居建設、さらには中世に

港町であった七尾が、寺社の移転を伴って城下町化する様相を紹介する。初期城下町については矢守一彦による城下町モデルである総郭型・内町外町型・町屋郭外型・開放型の4類型に拠りながら広島と米沢のプランを説明する。さらに、家康は当初、江戸をタテ町型として建設したが、天下人となってからヨコ町型へと改造したことを紹介している。このほか、近世初期の港町として長崎を取り上げた。

第6章からは村落景観が対象となる。まず、古代・中世の特徴としては、古代の律令制下の土地制度の基盤となった条里プランとその機能の変遷過程を4つのステージに分けて述べる。ステージⅠが「律令の条里プラン」、Ⅱが「国図の条里プラン」、Ⅲ・Ⅳが「荘園の条里プラン」に相当するだろう<sup>9)</sup>。古代には条里地割の分布や実際の耕作率は限定的であったが、中世における農業技術や施肥などの進展によって平野部での農業的土地利用が進んだとした。さらに、前記のステージに対応させる形で8～12世紀の散村ないし小村の展開、奈良盆地での12世紀の荘園村落周辺の塊村の出現など村落景観の形成と変遷を、条里地割も関連させた3タイプ4時期のモデル図で示している。あまり奈良盆地とその周辺の話に特化すべきではないかもしれないが、歴史的意義を考えると集村化とも関連させて環濠集落の形成にも言及があれば良かったかと思われる。

第7章の近世村落については、まず、いわゆる「大開墾時代」を迎えて平野部において新田をはじめとする農地開発が進展したことを、村数や耕地面積の増大、溜池や水路開削、新田計画数の変化、人口増加の数値を示して解説した後、新たに生まれた村落景観として新田村落をとりあげる。その地形条件の違いから洪積台地に立地する武蔵野の小川新田、ラグーンの干拓と堤防沿いへの集落の立地が比較的分かり易い紫雲寺潟、および大阪湾沿岸部の新田を紹介する。新田開発が日本村落の景観史に与えた影響の大きさを示唆する。一方で山地部については、切添新田などの小規模開発を紹介する。また、山林の景観では、西日本の人口圧による木材や薪炭、緑肥の需要の増大が森林植生の破壊をひきおこし、広大な松林の出現を招いたり、ハゲ山が拡大したりしたと述べる。さらに17世紀後半の材木需要の増大から紀ノ川上流

の吉野地方での杉の密植による植林の進展を概観する。本章ではしばしば日本では20世紀に最も劇的な景観変化あったと考えられがちであるのに対して、実は17世紀にこそ最大の景観の変化があったとする。

第8章では、地方の近代化に目を向ける。明治政府の成立が日本の景観においても近代化への転換点であったとし、農村地域の特徴として「移民」と商品作物栽培の発達をあげる。まず「移民」に関しては北海道の殖民と殖民区画をあげ、ついで内地の村落景観の新たなものとして殖産興業政策による開墾地、牧場の出現、桑畑の拡大について概要を述べる。さらに明治33年施行の耕地整理法により区画整理が行われ顕著な景観変化が見られたことを、福井県坂井郡木部村を事例に紹介する。しかし、紹介子としては、実際に木部村のような区画整理による顕著な景観変化は少数派であり、農村景観の変化という点では、1961年の農業基本法施行後に創設された圃場整備事業の影響が極めて大きいことを重視したいし、第6章で紹介された条里地割との関連も視野に入れると圃場整備にも言及して欲しかった。このほか、山林の景観として前章でも触れられたハゲ山の拡大とも関連して、近代における植樹祭が紹介され、その多くは神武天皇が亡くなったとされる4月3日に行われたことなどに触れ、緑化と天皇制との不可視な象徴関係に言及し、文化地理学的な成果を取り込み、次章への伏線としての役割を果たしているともいえよう。

第9章では、古代・中世を金田氏が、以降を上杉氏が執筆している。まず、方格線が描かれた古代荘園図を条里プラン・条里呼称法の成立や絵師の違いなどと関連させて解説する。それに対して中世荘園図は絵画的で大縮尺であるという特徴を指摘し、「日根野村荒野絵図」と「伯耆国東郷荘下地中分絵図」を例に挙げるとともに、解釈にあたっては多様なバイアスを含む点に十分な注意を払うべきであると指摘する。一方で、行基図や五天竺図などについては、小縮尺図であるため景観復原研究に直接結びつくものではないが、当時の人々の国土観や世界観を知るには有用であるとする。近世については国絵図を中心に、正保度には琉球国絵図が作成されたにもかかわらず日本総図に現れない<sup>6)</sup> ことについて触れ、薩摩藩の支配下

にあるとはいえ対中国貿易政策の観点から、中国との冊封関係を容認したことによる見方を紹介した。また、各種の地図が板行される状況、幕藩体制の確立に伴って国内移動が比較的容易になってツーリズムが発達し、それにより案内地図類の需要が増大したことや、「流宣図」を例に図の改訂を出版業者の販売戦略に着目して解説する。さらに、鳥瞰図の登場にも触れ、明治以降の図に見える地名や描出範囲の差などから帝国主義的国土の表象を読み取ることができるとしている。

第10章は、万葉集や古今和歌集、さらに紀行文などの文学作品、山水画や絵巻などの絵画に描出された景観に着目する。明治期の写実主義や自然主義的傾向の文学と絵画に表現される景観について解説を加える。また、一般に外国人にもなじみの深い富士山を取り上げ、国家主義的な国威発揚の要請という文脈の中で象徴的に扱われていることを紹介する。万葉集に詠まれた富士山について2箇所で触れているが、別個に取り上げるのではなく、時代の移り変わりとともに富士山の見方がどのように変わっていったのかを、通史的に文化的・政治的背景（文脈）を解きほぐしながら論述してもよかつただろう。そうすれば日本らしいテーマであり、外国人にもより興味深く、理解も深まったのではなかろうか。

第11章では、「モニュメント」を過去を象徴する現代的テーマのキーワードと位置付け、古代～中世の石碑を政治的・文化的な背景に触れながら紹介する。ついで過去と現在をつなぐ装置として、並川誠所が18世紀に摂津国の式内社を比定し石碑を建立して顕彰した例を挙げている。さらに近代にさかんに開催された「記念祭」をいわば無形のモニュメントとして取り上げ、national identityやlocal identityとの関わりを政治的・文化的文脈において解説している。

第12章では日本景観史の特徴として、都城の出現、条坊、平安京の都市の実態と変容、さらに政治区画について総括する。そして現代における村落景観の形成と変化について概観し、建築資材の多様化による景観の「混乱 (confusion)」と評する。すなわち、日本全土の景観に対して工業化と都市化が村落地域を浸食し、深刻な混乱を惹起したとし、さらに農業基本法下の圃場整備に言及

し、日本の都市景観、村落景観に対してともに望ましい有効な政策や包括的な合意がなかったと指摘した。2006年に至ってようやくいわゆる景観三法の成立を経て、伝統的な景観の重要性に対する認識を広める第一歩が踏み出されたとする。最後に、全総から四全総の展開を通じて国土の不均衡発展は解消できず、「五全総」では国土構造転換の必要性和多軸型国土構造の形成が目指されたが、結局、東京への一極集中に終わったとした。空間組織の変化について、経済や文化のグローバル化に直面して国土全体での改革が議論されつつあるが、現状のごとく東京への一極集中が続くことは、景観の混乱に影響を与え続けるだけではなく、空間組織の階層構造の変化に拍車をかけることになるだろうとして締めくくる。前半では第2章や3章との重複感が否めないが、本書の総括としてみるとやむを得ないところであろう。

以上、長々と本書の内容を紹介してきたが、それは取りも直さず本書が日本の景観を通史として描き出し、日本の歴史地理学の現在を景観史を軸に提示したと評価し得る成果だと思うからである。今一度編者の景観史に対する立場をまとめると、次のようになるだろう。すなわち、景観の変遷を明らかにするには、景観の構成要素を詳細に検討することはもちろん、その政治的・社会的・文化的側面の歴史的コンテキスト（文脈）についても視座に収めて総合的に検討を行い、総体としての景観変遷を把握する必要がある。さらに変化のプロセスや景観の配置パターンの分析にまで進み、個別事象の位置や分布の変遷を捉えるにとどまらない、時間的空間的事象のプロセスの解明を目指そうとしており<sup>7)</sup>、景観の語もドイツ学派の景観概念に沿うものであろう。そこで、本書の内容を振り返ると、8章までがこの景観概念に沿うものであるのに対して、第4部の9章～11章は趣が異なり、絵図、古地図、文学、絵画、モニュメントを介して景観表象を対象としており、時に心象風景への接近であったりする。読者としては対象の違いに戸惑いを覚えるかも知れない。したがって第4部の冒頭あるいは本書のはじめにでもこのような相違についての解説があれば、この戸惑いもなくなると思われる。

また、編者は文脈論的アプローチに重要な地位を与え、第1章において強調している。景観形成

を考える際に、今や政治的・社会的・文化的側面のコンテキストに目を向けないことはありえないとさえいえ、首肯できるものである。行動論的、認識論的なアプローチに注目が集まる中で、編者の文脈論的アプローチは改めて歴史的背景にできるだけ幅広く意を配り、景観変化の背景（コンテキスト）や要因を分析すべきであると理論化し、強調したものと捉えることができよう。

このような概説書を編もうとする際に日本景観史を主題とする場合に限らないが、とりわけ外国人を読者と想定する場合、読者がどの程度日本の歴史地理や歴史を理解しているかの把握が難しいために、具体的に何をテーマとして取り上げ、どの程度の説明を加えるかは大変難しいと思われる。この点では、本書は隣接分野にも幅広く配慮が行き届いており、編者の教え子である山村亜希、米家泰作、上杉和央の3氏との共著であるだけに、編者の『景観史』の立場を反映しつつチームワークよく、目配りがなされた編集となっている。その苦勞のほどが偲ばれるとともに、限られた分量の中で取り上げられた景観は、執筆者が当該の景観をどのように評価し、景観史に対するインパクトの大きさをどの程度であると見ているかを示唆するものでもあろう。

最後にやや瑣末に過ぎるかも知れないが、海外の読者を意識した場合に、全体を通じて少しばかり気になった点および若干の感想を記して文献紹介の責めを塞ぐこととしたい。

第12章で2006年が景観の重要性に対する認識の画期となったと指摘するが、このことは同年1月に「近江八幡の水郷」が最初に重要文化的景観に選定されたことを指していると思われるが、具体的に明記しないと分かり難いのではないだろうか。また、細かいことではあるが、267頁で藤原京建設を684年（天武天皇13年）とさりげなく述べているが、まだ未解決の問題であり、簡単に記す必要があるとはいえ、若干の注記が望まれるところであろう。

編集・校正に関して、文献の刊行年に誤りがいくつも見られたことや本文で触れられた文献がリストアップされていなかったり、文献引用法に不統一がみられたりしたことなどが惜まれる。また、第2章には参照・引用文献の注が付されていないが、やはり外国人読者向けの参考文献だけで

も付しておくのが親切であろう。また、全体を通じて、地名はイタリックで記す方が分かりやすいのではなかろうか。

つぎに、地図に関する希望である。本文で言及される地名については、可能な範囲で図に入れる配慮が欲しい（例えば、図4.1では法勝寺や二条通り、七条通りなど）。図6.4については大変興味深いモデル図であるが、不鮮明であるし、図に即してもう少し詳細な説明があればと思う。本図はモデルの4時期をA～D、3タイプをⅠ～Ⅲと表記しているの、本文中のⅠ～Ⅳのステージの区分との間で誤解を生じるおそれがあるのではと危惧される。本書に限らないが最近の傾向として図版がスキャンされて印刷されるのか、図や写真が不鮮明であるものを時に目にするが、本書でもこの図6.4や図11.5など不鮮明であったり、写真でコントラストや明るさが適切でなかったりするものが目立つ。折角の本書が、画龍点睛を欠くところであろうか。とはいえ、本書は外国人だけではなく多くの日本人の読者にも是非一読をすすめたい。そのためにも手軽により多くの人を読めるように日本語での出版も期待したい。紹

介子の読解力の足りなさから誤解や一方的な紹介になったところがあるのではと懼れるが、その点についてはご寛恕いただければ幸いである。

なお、本書については『地理学評論』83-6に今里悟之よる書評があるのであわせてご覧いただければと思う。

（出田和久）

#### 〔注〕

- 1) 日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座 第2巻 景観 1 原始・古代・中世』雄山閣出版, 1990。
- 2) 日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座 第3巻 景観 1 近世・近現代』雄山閣出版, 1991。
- 3) 金田章裕『日本古代景観史の探求—宮都・国府・地割—』吉川弘文館, 2002。
- 4) 金田章裕『古代日本の景観—方格プランの生態と認識—』吉川弘文館, 1993。
- 5) 前掲4) 250-286頁。
- 6) 寛永日本総図にはじめて琉球国が現われる。
- 7) 前掲3) 1-13頁。